ALLIANCE OF HOPE
アジアとともに未来をつくる

PEOPLE'S PLAN 21 世紀

ピープルズ・プラン21世紀 実行委員会
東京都千代田区神田神保町1-32-45
電話03-219-0471 FAX 219-0473
郵便振替 東京5-367410
銀行口座 第一勧銀神保町支店(普)1283135
口座名 ピープルズ・プラン21世紀

ニュース
最終号
1989.12

ピープルは出会い、そして越境する

―第四回実行委員会報告―

プロセスを生かそう

八月の嵐のような一連の行事を終え、後片付けも一段落した十月二十一、二十二の両日、伊豆の天城山荘で第四回全国実行委員会が開かれました。各行事を通じて何が見えてきたかの報告と、今後どうしていくかについて多くの意見が交わされました。PP21実行委員会はひとまず解散が確認されましたが、なおプロセスとして取り組みを続けることになりました。

PP21の諸行事は全国各地で同時多発的に行なわれたため、すべてに参加することは不可能でした。ですからこの第四回実行委員会と同日発行された報告集で初めてPP21の全体像が明らかになりました。①日本そして世界の急激な状況の変化にかみあうことができたという点でタイムリーであったこと、②八月になって海外から多数の参加者が訪れたことによって準備段階では見えなかった新しい地平が開けてきたこと、③本来の力量を越えた行事を担ったことで新しいつながりもできた一方で内部の矛盾が噴出したこと、などが共通に語られ、④プロセスとしてのPPをさらに生かしてゆこう、という意志が確認されました。

今後については、水俣で海外参加者と一九九二年にアジアのどこかで再会することを約束したわけですから、そこに向けて水俣宣言をどのように実現していくか、をめぐってさまざまな意見がだされました。水俣では国際的な宣言をしか出せなかったので、それを受けて日本をどうしていくかについて「フォーラムなどを重ねる」、「地域にアジアとの連帯の拠点をつくる」、「自由学校を始める」、「調査運動を継続する」、などなど。またPPのネットワークの一番広い範囲の人たちとともにできるような「月刊誌を出そう」という大胆な提案も出され、論議されました。が、時間が足りなくなって、具体的な結論は出されていません。実行委員会を継続して議論を深めようという提案もありましたが、いったん実行委員会としては解散し、水俣宣言をより広い人びとと共有し、その実現を推進するために「世話人」をおくことになりました。実行委員会の解散にともない水原博子、村井吉敬、武藤一羊の三コーディネーターは解任となり、これからはコーディネーターの役割を全国の人びとが分かち合おうということです。世話人の性格、役割などについては議論ができなかったので、一月一四、一五の両日、世話人準備会として議論を継続することになりました。是非ご参加ください。

PP21とは何だったか

▼つきつけられたオルタ

Alliance of hope と、今年の春、全世界に招待状を送ったところ、「アンビシャスである」、タイムリーである」という点で非常によい反響を得た。PP21の何が新しかったかというと、ひとつは野心的ではないと思われていた日本の民衆運動がPP21を国際的に行ない得たこと、もうひとつはオールタナティブを求めたこと、さまざまな階層や問題を関連させて、ひとつの「希望の連合」へのプロセスを作ろうとしたことだ。

オールタナティブの議論については、実行委員会のなかではどうも頭も尻尾もないような感じだったが、海外参加者と一緒になって議論することによって、パッとヌエ的議論から脱出できたのではないか。サバ、サラワクから来た人が「木を使うな」といえば、我々は「オールタナティブ」にならざるを得ないのだ。

（コーディネーター・武藤一羊）

▼歴史が変わる関係性

十年前だったら、祈り、踊りなどは迷信だとか、意識が進んでないとして観察するという視点しかなかったかもしれない。いま、歴史は変りつつあり、PP21の思想がその歴史の真ん中にあるのだと思う。

（東京、起草委・ダグラスラミス）

▼多民族共生を宣言

世界先住民族会議では、会議のはじめと終わりに「祈り」が行なわれた。先住民の祈りそのものがもつ新鮮な雰囲気の中で、立って手をつないで輪を作り、心を通いあわせる関係がもてた。

また、北海道はアイヌモシリであるということを宣言に盛り込め得たことと、「多民族共生を願う日本人の立場から」が出せたことは意義あることだったろう。

ただ、1年半余りの実行委員会のなかにアイヌ民族の参加者が少なかったのは反省材料だ。「アイヌ民族のための」会議ではなく「アイヌ民族の」会議を開くことが課題だったと思う。「ピープル」という言葉は単語としては抽象的だが、ある文脈と具体的な闘いの関連において新しい普遍性を獲得できるのだということを発見した。

（北海道、地域シンポ・花崎皋平）

▼国際連帯で農業まもる

菅野さん

村のなかに自分の身をおいて考えると、出口がないという危機感やあきらめがある。PP21を山形でやって軽く一皮むけたという気がする。会議に参加した県の農林関係の職員は「この百姓国際交流会は、農林省、県、市町村の農林関係者の関心をひいている。我々はどのような農業、農民を指導したらよいのかわからない。農協や行政に対して一線を画し、農民が自主的に集まって海外から人を呼び、二十一世紀の農業を討論しあう、これは驚異だ」といった。

「多国籍企業が日本や世界の農業を破綻させている張本人である」とアメリカ、タイ、オランダの農民たちがきっぱりといい、それが広く確認できた。そしてまた第三世界との関係、農村女性の地位の問題にも気づきはじめた。

これまでの農協を基盤にした農民組合の運動にこれらの観点が入ることは、どえらいことだったと思う。

（山形、百姓・菅野芳秀）

▼ODAをなくしたい

加地さん

鈴木さん

神奈川県では国連大学と一緒になって日本平和学会が国際会議を何回かやってきたが、決議され討論されたことがどこかの書類箱に入ってしまって、県民のものにならないばかりか他の学者にインパクトを与えもしないし、アジアから来た人々にも「何のために我々は毎回出てくるのか」と思わせてしまっていた。PP21では、もっと実のあるものにと、二十一世紀を展望するようなアジア太平洋の国際関係、日本の位置付けを討論した。しかも専門家の会議にしないため、市民の会議、公開シンポジウムもやろうと二本立てにした。女性や労働者をはじめいろんな団体が一堂に会した。

日本は全体として変りつつある。「連合」が「総評」の続けてきた運動に新しい転換を求めてきていることも確かだろう。神奈川国際シンポにあたって、県評、自治労など労組を回ったが非常に反応がよい。ODA（政府開発援助）について市民が集会をすることを「

ありがたい」といっている。変ってきていると思う。私たちが働きかけるチャンスだ。

基金を作って送るのではなく自分たちがいく、アジアの草の根ネットワークを作って広めていくといった運動をやりたい。

ＯＤＡを将来的にはなくすこと、草の根としてアジアとどう関わって、私たちの生活のあり方をどう変えていくか、というところまでやりたい。

（神奈川、北沢洋子）

▼労働運動の転換期に

労働者国際会議も、総評が解散するという歴史的な時期に取り組めたのはタイムリーだった。ただこの会議を担った「労働情報」「十月会議」といったまともな労働運動を作ろうとしている労働者自身、国際連帯については無関心であったといわざるをえない。「この時期に国際会議を開くとは何事か」という議論もあった。労働運動のなかに、質よりも量を求めるという体質があるが、こうした問題点を追求することが必要だったろう。

海外参加者を日本の労働者の家に分散して宿泊させたのは非常に好評だった。

（東京、労働者・鈴木和夫）

▼問われた「消費者」枠

消費者運動はこれまで欧米リード型であったが、今回初めてアジア・太平洋地域で議論しあうことができた。テーマを多国籍企業の問題に絞って話し合ったが、その母国のひとつである日本に住む消費者として私たちはあり方を問われている。ＰＰ21に参加して、「消費者」という狭い枠がとっぱらわれた点が成果だと思う。

（コーディネーター・日消連・水原博子）

▼地域でつなぐアジア

アジアとの接点の少ない福岡という地域のなかで、手をつないでスタートラインを作ろうとしたのがアジアンフェスティバル。同時期に、行政と企業が一体で「よかとぴあ」という四千億円を使ったアジア太平洋大博覧会を開いたので、それに対峙するものをやりたかった。質的には乗り越えられたと思う。運動の盛り上がりとともに実行委員会に参加する市民団体、生協組合員の数もふえた。

（福岡、アジアンフェスティバル・中村聖）

▼生協運動のオルタを

グリーンコープは三年前からネグロスキャンペーンにとり組んでいて、「オルタトレードジャパン」というのが十月二十日に正式に発足した。この民衆貿易は東京の生協や大地の会などとネットワークを組んで行なっている。アジアンフェスティバルが終わった後も実践課題が継続しているわけだ。熱帯雨林の問題に絡んでリサイクル運動を強化しようともしているところだ。

日本の生協運動は非常に大きな力を持っているわけだが、アジアの視点を持った消費者運動でないと単なる消費者利益を守るだけの運動になってしまうだろう。全国の生協運動をどのように変えていくかが今後の課題だ。

（福岡、グリーンコープ・木戸宏）

▼強制連行の跡をたどって

水俣の国際会議に、韓国・朝鮮の日系人十四万人、在日韓国・朝鮮人七十万人、そして強制連行後サハリンに置き去りにされた四万三千人の朝鮮の人々のことをどう考えるか、また日本政府が怠っている台湾を含む旧植民地に対する戦後補償の問題を、キチンと提起できなかったことに大きな後悔と力不足を感じている。九州・山口実行委の「強制連行の足跡を若者とたどる旅」は、ＰＰの一環として計画・実行されたにもかかわらず、独立して存在した感があったことも起因としてあるだろう。中蘇離散家族会長を九州によび、長崎までの旅に同行してもらったが、四万三千人をいかに帰国させるか、という困難な運動を続けている人と「日韓連帯」をどういう形で実行するのか大変難しく感じた。

（九州・山口、村田久）

▼難しかった女性フォーラム

アジア女性フォーラムの一番の目的は、日本のフェミニズム運動と第三世界の運動を結びつけることだったが、その壁を越えることはできなかった。例えば「出稼ぎ女性と人権」の分科会では、日本の中で性暴力、性の商品化と闘っているフェミニストが、「アジアの問題は自分たちにとっては二の次だ」という。第一世界、先進工業国の女性運動の壁を内破るのがどんなに難しいか、先はまだ見えない。ただ、一般参加者からは「アジアの女性と出会えてよかった」との評価があり、ＰＰ21に関わった男性が「フェミニズムとは何だろう。自分たちとどういう関係があるのだろう」と考えるキッカケになったとすれば、それが成果だろう。

（東京、アジア女性フォーラム・松井やより）

▼重層した沖縄の叫び

アジア太平洋琉球弧住民交流集会には十一ヵ国、十三人の海外参加者、ヤマトからは四十人くらいが参加した。初めての人が多く、南部戦跡や基地の状況を見たことは有意義だった。

在沖米軍の実態と動向の報告、とくに恩納村の都市ゲリラ対策訓練施設（グリーンベレー）、ヤンバル、伊江島におけるハリアー基地建設に反対する村民の闘いは従来保守的だといわれている所でのものであり重くうけとめられた。

沖縄アピールは始め、沖縄とアジア太平洋地域の人たちの協議によって日本が太平洋戦争においてアジアを侵略し、沖縄の人々は殺され奪われたと宣言していたが、沖縄の人からも「奪われただけでなく日本軍の一部として加担したと書き加えるべき」との議論が起こった。ヤマト（日本）と沖縄の関係、ヤマトと奄美の関係、沖縄も含めた日本とアジア・太平洋の関係という重層的な関係や歴史をどう撃っていくのか、準備不足でもあった。

（京都、反トマ連・舞田宗孝）

この場で、ＰＰ21第四回実行委参加者一同の名で、米軍の都市ゲリラ訓練施設の建設反対を闘い続ける恩納村民のみなさんへ、連帯アピールを送ることが採択された。

●メディアを創出しよう

これからどうする!?

もう一回ＰＰ21をやるくらいのつもりで、ＰＰのプロセスを継続してゆく場を保障できるようなメディアをつくりたい。ネットワークをどう残すか、という組織的継続形態を先に考えてもだめ。共通に一緒にやることがあって初めて集まりをもつ意味がある。守りではなく、つぎにどう攻めるかの観点であたらしい文化、言語の獲得をめざしたい。

まだ運動にはなっていないがパワーがあるところと話すことば、運動の「中をつなげる」あり方をこえて、コミュニケーションできるような人、マスコミに働く人などとつながってゆけるものでありたい。

北海道・九州・東京の三脚で推進してゆくセンターとし、ＰＰにプロジェクトをもって参加したところは世話人をだす。それにやりたい人を加えて、計画を具体化する世話人会をつくってみてはどうだろうか。

海外の参加者と共同でつくったアクションプログラム（行動計画）への責任を果たす必要もある。ＰＰは、運動のセットではないし、アクションプログラムも限定した人びとが担うようなしかたでその実行を考えるべきではない。しかしＰＰに参加した人が行なっている運動を互いに、たしかに、支持しあったのだ。変革をはらむ形でつなげてゆくあり方を、たとえば、熱帯林サラワクの問題と日本の原生林を守る運動とどうつなげられるかなどまで、今後は追求しうるのではないだろうか。

ＰＰでめざす希望の連合は、統一戦線ではない。一致点において結び、相互不干渉というのではなく、相互干渉しながら干渉する主体も変わってゆくというあり方を求めたい。

（コーディネーター・武藤一羊）

MESSAGE

ジャニー・ラシンバン（マレーシア）

私たちはあなた方の暖かさと惜しみなく共有しようとする態度にとても感謝しています。そして、引き続き対話していくことを楽しみにしています。私たちはニュースレターを始めとして、様々な方法でサバの状況を知らせていこうと思っています。ルシアと私は、サバ・キリスト教徒運動とともに、森林伐採や熱帯林の保護に関する公的な支援組織を作ろうとしています。ＰＰの会議でサバでもそのような組織をつくる緊急な必要があると感じたのです。

ザビエル・ゴロスティアーガ（ニカラグア）

ＰＰ21の水俣会議で日本のみなさんにお会いできたことは栄誉であり、とても楽しかったです。なんて楽しく、精神的なリフレッシュになったことでしょう。多様な文化や宗教、人間の経験と出会い、同時にわたしたちの共通性、共通の価値、関心、驚異の一致と連帯の発見でもありました。私たちは基調報告と水俣宣言をスペイン語に翻訳しました。これらは私たちの雑誌やラテンアメリカ中の民衆の刊行物に発表されるでしょう。

ＰＰ２１報告集・資料集を！

★希望の連合へ・１９８９年夏／報告集１０００円
★歴史を担って未来へ向かう・世界先住民族会議記録集１０００円
★89ＡＷＳＬ労働者国際会議報告集（資料と３冊セット）１５００円
★新聞報道に見るピープルズ・プラン２１世紀　４００円
★オールタナテイブ討論資料集１・２（セット）１５００円
他、続々刊行中。０３（２９１）５９０１まで

●オルタ深める場を

世話人会づくりに賛成。しかしPPの継続は、ひろげてゆくためにも枠（実行委員会）は一回こわすことが大事。夏までで不十分だったオルタナティブを構想する議論を深める場がぜひほしい。世話人会はその場を提供してゆくメディアの発行について作業の焦点をおき、ある程度機能を限定してはどうか。

（東京、オルタ委・白川真澄）

●地域で足場がためを

すぐにメディアをつくる世話人会をひらくというより慎重に考えたい。水俣宣言やPPでの獲得を各々の地域で深めてゆく作業は絶対に必要で、それなりの時間もかかる。PPに触発されて独自に動きだしたグループとも共有できるネットワークを作りたいという声も九州にはある。

積み残し課題をふくめて、足場をかためながら全国で論議しあう場は今後も要るだろう。そういった世話役を事務局まかせでなく分けあってゆくものにはしたいと思う。日本の民衆運動のなかでもPPへかかわったのはまだまだ一部であることを認識して新しいステージを用意していこう。

（北九州、地域シンポ・村田久）

●国際共同調査の継続

先へうつメディアと、獲得したものを消化していく学校や旅、調査運動の取り組みが要る。調査運動については、国際共同調査としてODA、その他をきちんと継続してゆく。ARENAのプロジェクトとして「アジア民衆白書」の共同製作をおこなってゆくことを提案し、決めたい。調査の位置づけをオルタナティブに向うものとしてはっきりできると思う。

（コーディネーター、ODA調査・村井吉敬）

ARENA：［新しいオルタナティブのためのアジア地域交流会議］・香港に事務局あり。

●守りと攻めと

攻めと守りの両方が必要。各地で宣言の中身の理論を定着させ自分たちのものにしてゆく作業が一年くらいはかかる。民衆のメディアづくりにむかって踏みだしてゆくことと自由学校などの取り組みと一緒にやってゆきたい。PPのオルタ資料・報告などについてフォーラムをやってはどうだろうか。メディアづくりはアンビシャスを感ずるが、内容が話し合われて前へ進むということを重視し、準備段階には余裕をもつべき。

（北海道、地域シンポ・花崎皐平）

花崎さん

●仕掛けが要る

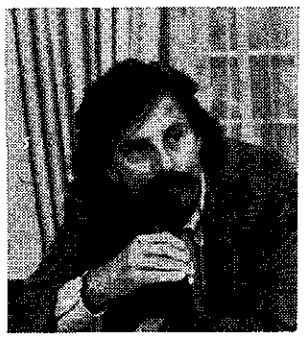
名簿上のネットワークでは実体化しないので、PPで多様に関わった人たちと一緒にやってゆく仕掛けが必要と思う。メディア発行とともに、財源と人づくりとしての自由学校、エクスポージャー、調査を動きのあるものにして各地をつなげ、全国で参加を促せるものにしたい。

（PP・PARC事務局、井上礼子）

●国際協力の体制づくりを

アクションプログラムは運動の対象リストにはなっているが、誰が何をどうするかの計画にはできなかった。そこで、PPの国内外の住所録をその名簿にあるすべての人に配布し、PPで支持を約束した見地に立って、各々の組織から直接連絡を送り協力を要請しあえる、という体制をつくったらいいと思う。

（東京、起草委・ダグラスラミス）



ラミスさん

●地域変え得るメディアを

この全国委員会の集まりを維持しよう、守ろうというネットワークなら、ここに来れない百姓交流会のなかまとともに希望の連合の発展をにないきることはできない。もっとおれたちの地域自身に革命が必要であり、共有しあいながら、さらにもう一皮むけて変化してゆくために、新たなメディアづくりに賛成。

（山形、百姓・菅野芳秀）

●刺身と煮っころがし

PPをやった各地間で、問題意識を共有しあえる、人の交流を進めたい。人に情報がついてゆくようなありかたで、旅（エクスポージャー）や動く自由学校などを構想していく。それは水俣宣言と各プロジェクトの内容を地域へもちかえり、現場を作ってゆくことともに行ないたい。一九八九年の「出会いと交流」のPPから九二年、その後へとつなげてゆくためにも定期的に集まる世話人会をつくるべきと思う。その場合事務局は思い切って東京集中をやめ、地方にふってはどうだろうか。

地方にいても国内外の取り組みや情報を軽くはやく知れる刺身のようなメディアと、もう少し中身の濃い煮っころがしメディアと両方つくれないだろうか。こってりしたメディアの方も学術発表的にではなく、地域から地域へ展開していけるものを考えたい。

（福岡、吉田登志夫）

●続けたい調査運動

北海道でのアクションリサーチをしきりなおすつもりで続けてゆき、運動として根付かせたい。先住民族会議での和人宣言の責任を果たすような取り組みを考える。

（北海道、地域調査・越田清和）

●世話人会は媒介的役割

PPのネットワークは、ある一定の認識を深めあい、方向づけを提示しながらそれぞれの自立を促進するものであるべきと思う。世話人会は、アジア・太平洋から日本を包囲するという方向で、媒介的役割を主要に担うべきだ。

（京都、舞田宗孝）

宣言と行動計画を決議したPPの地域間、海外、さまざまな出会いをどうネットワークし実行していけるか。より広い人々のものにできるか。どしどしご意見を！

海外からの反響

全国で行なわれた国際民衆行事の海外参加者は三十一ヵ国、二百八十一人にのぼりました。PP以後、手紙や記事が続々と届き、さまざまな意見が寄せられています。仲間の声を、抜粋してご紹介します。

8月14日釧路　イタオマチプの船出

ジョモ・スンダラム（マレーシア）

PP21のプログラムへの参加で私は大いに励まされました。その第一の理由は、この十年間の保守主義の台頭にもかかわらず、アジア太平洋地域での進歩的民衆運動の実在とダイナミズムを確かめることができたからです。第二の理由としては、異なる国の異なる性格の民衆運動の間での相互理解と協力の可能性と潜在力を具体的に確かめることができたからです。

水俣では、多くの重要で有効な考えが出されましたが、私が知るかぎり実際に具体的な活動のかたちへと発展したものは、非常にわずかです。私たちが直面している問題があまりに多く、それを克服するための機会や手段が限られていることも事実です。にもかかわらず、PP21がもたらした貴重な機会をとらえ、これを無にしないようにしたいものです。

今、チャレンジしなければならないことは、こうした既存の課題別のネットワークをネットワークすることです。不幸にして、非政府組織（NGO）や民衆運動も社会組織上の無力さを免れてはいません。完全に新しい地域ネットワークをつくることは必ずしも必要ではありません。けれど、私たち自身が、既存の組織、ネットワークの問題点、限界、弱さ、不適切さについて困難でむずかしい問いかけを自らに発しなければなりません。機構の維持を自己目的化するような、まちがった傾向を避けなければ。このことをはっきりさせた上で、私たちがともに直面しているチャレンジに適した新しい組織の仕方を創りだす責任を放棄してはならないと思います。

マレーシアのような国ではナショナルなネットワークは非常に穏健なレベルでしか存在しません。他方、多くのマレーシアのNGOは特定の問題についての地域ネットワークに加盟しています。有効で傑出した地域ネットワークの発展は、確実に必要とされている傑出したナショナルなネットワーキングのプロセスをおおいに助けることでしょう。

あまりに野心的になって、非現実的で、達成できそうにない目標を設定することは間違いです。参

ＰＰ２１・世話人準備会へ！

―― これからのＰＰ21、水俣宣言からの出発 ――

１９９０年１月１４（日）－１５日（月）　日曜午後１時半～月曜正午まで　東京・錦友館（水道橋／神保町下車）にて

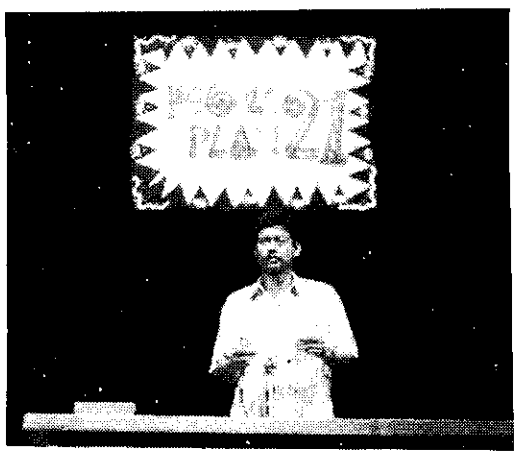
お問合せ先は、０３（２９１）５９０１アジア太平洋資料センター

加者を失望させたり、ネットワーク自体の存続可能性、存在、望ましさを脅かすことになります。

さらに鎖はその一番弱い環と同じ強さにしかならないこと、そして団結はその共通の水準に基づくのであって、必ずしもそれ以上ではないことを認識しなければなりません。私たちが直面している異なる文化的背景や政治環境に鈍いことで、潜在的な同盟者や友人を遠ざけないように気をつけなければなりません。同時にそのような配慮の結果、便宜のために原則を放棄し、粗野なプラグマティズムや日和見主義に陥らないようにすべきです。

水俣会議でのじゃなかしゃばを求める叫びは今も私の心のなかにこだましています。ＰＰ21への参加は私にとって活動に関わっている多くの人に会える貴重な経験でした。

ＰＰ21で女性、農民、労働者、先住民などの特定の課題・関心についての多様な、既存の諸地域ネットワークをネットワークすることを考えてくださるよう希望します。そのような「トランス・ネットワーキング」は、調査や分析や論争を促進するだけでなく、たとえば森林伐採における先住民の権利と環境といった大きな、互いに関連しあう諸問題をめぐっての緊急行動やキャンペーン、広範囲のコミュニケーションを強化することに役立つでしょう。



NEWS LETTER

ウインドスピーカー紙　１９８９年9月8日号より

一人のダフィールドのインディアンが日本で行なわれた国際会議からちょうど戻ってきたばかりである。「私は希望に満ちている。何らかの変化が起きるだろう。」エド・バーンスティックは語っている。「世界中で起きていることは私たちの態度が変わらねばならないことを指している。」「世界のさまざまな場所で民衆にとってとても悲しい話や不幸な状況がある。もし世界的視野で物事を見れば世界が進んでいる方向に疑問を抱くだろう。」彼は八月のほとんど日本にいてピープルプラン21世紀のいくつもの会議に参加した。「行動の計画をたてるためこの会議を組織した人びとが問題意識に関しての次のステップを踏みだすのはすぐであろう。多くの政府は将来何が起きるかということについて関心がない。現在起こっていることや自分たちが利用するために、開発による利益をどのように使うのが一番いいかということにしか関心がない。」

国際インディアン条約会議のメンバーとして、バーンスティックは日本の一番北の島、北海道で開かれた先住民族会議に焦点をあてた。そこは１２００年に日本人によって侵略された先住民、アイヌの故郷だ。彼はその会議に参加した世界中からの参加者３０人のうちの一人だった。メキシコ、ソ連、ブラジル、マレーシア、インドから来た人たちもいた。ＰＰ21の未来への計画はこの他、環境、農業、女性などのことも扱っている。彼はまた、日本の南の沖縄の平和会議、福岡の文化フェスティバルや水俣の会議にも参加した。「今回は旅行したり、人びとと話したり、運営委員会や会議に参加したり、ホームステイをしたりときついスケジュールだった。」という。　たくさんの宣言や決議がこの会議からうまれた。「抑圧された人びとには、自分たちの生活を左右する決定の実施については、その決定がどこでくだされるにしろ、これを批判し、これに反対し、かつその実施を阻止する天賦のかつ普遍的権利がある」と水俣宣言はいっている。　先住民族会議の参加者は、カナダとアメリカの政府は、先住民が自分たちの政府を持ち、現在の彼らのことについての取り決めや条約を尊重するよう求める決議を発表した。

ＰＰ21に参加したことは、おそらく私が忘れることのない数少ない人生のハイライトのひとつでしょう。カナダや世界中に行き渡っている先住民の新聞にはＰＰ21の会議のいくつかの記事が載っています。

イズラエル・バチスタ（世界キリスト教協議会）

日本的な仕事の仕方といえるだろうこのような会議は私にとってすこしきつすぎました。時間は厳格に決められていました。日本人がなぜトヨタやセイコーをこんなに生産できるのかわかった気がします。新たな経験として、このような問題は分析されなければなりませんが、沸き起こった期待は困難をのりこえました。

ＰＰ21はローカルなコンテキストと地域的、さらには地球的なパースペクティブをつなげる努力でした。このアプローチは国際的な新しい仕事の仕方であり、方法論的なオルタナティブの新しい可能性です。文書の量という点ではむしろ貧弱だったと言えるでしょうが、ＰＰ21の行事／プロセスの豊かさは、話し合い、共有したいテーマをもった人びとの出会いでした。八人、十人、あるいは二十人という人びとがひとつの部屋に寝泊りし、共同風呂に入り、ともに歌い、ひとつの行事についてではなく民衆の問題についてプランを練り、参加者の大半が互いに発見しあう。ローカルなグループがプログラムのコンテキストを決定するというのは私たちの会議では常にないスタイルです。人間的な次元がこのプロセスではもっとも高次のものでした。

この行事は、教会の範囲を越えたものであると同時に、教会が民衆の闘いを支持し、自らのものとする可能性と限界をも明らかにしました。民衆運動と宗教者の運動との関係について、また教会が新たな可能性にオープンであることの必要性を認識させました。

現在の社会・政治・経済的な状況に立ち入り、この現実に影響を及ぼすことを望むならばコミュニケーションの問題を脇によけておくことはできません。ＰＰ21から明らかになったもっとも大きなチャレンジのひとつは正義のためのコミュニケーション・システムを築くことでした。私たちはコミュニケーションを、明確なオルタナティブをもたないままばらばらに扱っています。コミュニケーションに関わるより包括的なアプローチを先延べにしておくことはできません。

オルタナティブの模索、希望の宣言はＰＰ21の心励まされる価値です。私たちが苦しめられている病状をのべるだけでは充分ではありません。パラダイムのいくつかも危機に瀕していることを認識しなければなりません。この時代の宗教者の運動の主な役割は、オルタナティブを求め、教条主義の悪夢を避けて、ともに夢見る人びとの出会いを助け、もっと人間的な未来への希望をともに宣言することだと思います。

十一月十五日、反ＧＡＴＴ共同行動

ＰＰ21に参加した山形・新潟・岩手の農民たちをはじめ、市民、労働者など八百人が集会、デモを行なった。銀座の街にトラクターを列ね、「世界の百姓は連帯して反ガット」等と書いたムシロ旗を掲げての行進だった。

編集後記

ピープルズ・プラン21世紀ニュースは、実行委事務局の解散にあたり、本号（NO10）をもって終刊いたします。

一九八八年六月の準備号から数えて11号を出しましたが、各地の実行委員会でもさまざまなニュースや通信が出された一年半でした。不慣れなものの手作業で、読み苦しい点が多々ありましたことをお詫び申し上げます。

主な編集にあたっておりましたのは、森川万智子、花崎晶、井上礼子です。

印刷で多大なご迷惑をおかけしたジャムプリントの皆様にお礼申し上げます。また、ＰＰ21パンフ、Ｔシャツ、資料集・報告集などのデザインは矢端保範さん、八鍬真佐子さんのご尽力をいただきました。

ＰＰ21に関するお問合せは、当面
東京都千代田区神田神保町１－30正光ビル
☎０３（２９１）５９０１
アジア太平洋資料センター（ＰＡＲＣ）へ

水俣宣言、その他の宣言・決議を載せた各地の報告集・資料集・ビデオ記録、掲載誌などがございます。残り少ないのでお早めにお求め下さい。

プロセスとしてのＰＰを生かしつつ、民衆が生かしあう21世紀へ・・・取り組みは続きます！みなさん、お元気で。

WE WANT *JANAKASHABA*

アジア・リンク　１９８９年９－10月号より
（民衆の発展のためのセンター・香港）

私たちは「ＪＡＮＡＫＡＳＨＡＢＡ」が欲しい。

一体誰が何を欲しがっているのか。…日本ではその地方の人びとの独特な経験や文化的視点を反映したおもしろい言葉を持つ方言がある。「じゃなかしゃば」は水俣の言葉だ。水俣は、1960年代に住民の多くが水銀中毒によって侵されていることが発見されて有名になった日本の南西にある都市である。「じゃなかしゃば」は「いまのようでない世の中」ということを意味している。その水俣で八月、ピープルズ・プラン21世紀の集約会議が行なわれた。これに先立ち、労働、女性、エコロジー、先住民など特定のテーマをもっていくつもの会議が行なわれ、最終的に水俣にそのすべてが集約された。ＰＰ21のすべての会議に共通していたことは世界の状況が一層悪化しているという認識である。貧困、無力、公害の増大。…現在、支配的な経済、政治、社会のシステムが、この増大する問題を解決することができるかどうかということを多くの人が疑問に思っている。現在の開発のモデルは生命自身の驚異になる、と警告した専門家もいるほど環境は悪化しているのだ。

一般の人びとが直面している問題ー時には私たちに悲嘆をもたらし、絶望の淵に立たせるのだがーの重大さを認識し、参加者たちはゲストとともに次のような新しい歌を歌った。「じゃなかしゃばが欲しかよ。私たちは、今のようでない世の中が欲しい。」と。